スペインでの「法華経」連続講演会より

インドおよび中国における法華経

ハビエル・ルイス・カルデロン

※この講演は2013年7月19日、マドリッド近郊のスペインSGI文化会館で行われたものです。〔　〕内は訳注です。

本講演では、インドと中国における法華経の歴史および影響を9節にまとめてみたいと思います。

初めの3節では、法華経が生まれた前後関係や背景、すなわちインド仏教とその文献、特に「経典」について説明します。第4節では、インドの言語で書かれた法華経の原典の外形面の特徴に触れ、第5節では、その形態や内容に関していくつかの観点から掘り下げます。第6節では、法華経の中国への伝来とその普及に関していくつかの見解を説明します。第7節では、法華経の漢訳について触れ、続く第8節・9節で中国文明に与えた影響をまとめます。

なにか目新しい内容を提供するというよりも、せいぜい通説をまとめたものであり、基礎的な法華経入門の講演にしたいと思っております。私は極東地域の仏

教の専門家ではなく、インドの思想と宗教を専門としており、法華経の歴史を語る際に最も多く見られる中国・日本からの視点の代わりに、インドからの視点でまとめていることが特徴であるとは言えるでしょう。

講演では、法華経の日本における輝かしい歴史と、それ以後の西洋への影響には触れません。ただ、幸運にも、このふたつの事項に関しては、この講演シリーズできちんと取り上げられております。〔カルロス・ルビオ氏と、フランセスク・トラデフロート氏の講演〕このふたつの講演を併せますと、法華経の内容と歴史に関する完ぺきな紹介となると思います。

1　インドにおける仏教

ゴータマ・シッダールタは紀元前6世紀、インドの北東部に生きていた人物です。高貴な出自でしたが、快楽に基づく普通の生き方に満足できない性質であることを自覚し、社会から離れました。彼は、その時代以降、多くの人々がそうしたように、束縛されたむなしい生き方を乗り越えるための智慧を得るために人生を捧げました。厳しい精神の鍛錬と探求を経て、ゴータマは菩提（梵語*bodhi*：しばしば悟りと訳される）に達しました。菩提とは、すべての事物のありのままの本質をダイレクトに知ることであり、これによって彼はすべての束縛から解放され、「仏陀」「覚者」「開悟者」となったのです。

いくつかの疑問を解決し、仏陀――ゴータマのスペイン語での通例表記Budaに従い仏陀と呼びます――は、彼が解放された経験を他の人々に伝えることを決意しました。その教え（ダルマ）は四諦（四聖諦）に要約されます。

1）苦諦：相対的現実は一時的で実体のないものであるため、むなしいものであり、それに執着する生は苦しみである――という真理。

2）集諦：実体がないことを知らないがために物事に執着することが苦しみの原因である――という真理。

3）滅諦：苦しみはその原因である無明を取り除くと、菩提によって根絶することができる。その結果が

涅槃であり、無明と執着と苦楽に根差した縛られた存在（輪廻）からの解放である――という真理。

4）道諦：悟りのための道、すなわち八正道であり、正見、正思、正語、正業、正命、正方便、正念、正定をつちかい実践せよ――と示す真理。

仏陀は、自身が直観した法（ダルマ）を説くことに人生を捧げました。出家にも在家にも弟子をもち、そこから教団が生まれ、後年には今日「仏教」と呼ばれる宗教が誕生したわけです。仏教は多様化しながら拡大していき、アショーカ王の治世（紀元前3世紀）にはマウリヤ朝の国教となりました。

最初期の仏教は（出家修行者のための）声聞乗 *śrāvaka-yāna* ですが、これを小乗仏教と呼ぶのは蔑称となってしまいます。紀元1世紀頃には大乗仏教が発展し始めます。その場所はまだインドでした。この新しい仏教の大きな特長は菩薩の概念です。菩薩は、自分が解脱することを求めるだけでなく、すべての人の救済を願います。これによって、仏教に献身の要素が加わりました。菩薩は歴劫修行によって大きな福徳を得て、高い境涯に住しており、物質的困窮や魂の救済を求めて彼らを頼ってくる人々を自らの徳で助けることができます。

また大乗仏教では、仏陀はただ単に「悟りを得た人間」ではなくなって神格化され、宇宙的な仏が目に見える姿で地上に現れた存在に変わりました。宗派によっては人間ではない絶対的な仏となりました。

大乗仏教は様々に展開していきました。紀元後の数世紀間に、中観派や瑜伽（ゆが）行派（唯識派）が出現しました。中観派では、すべての相対的事象には固定的な実体（自性）がないとして「空」を説き、瑜伽行派では究極の実在である無限の「識」の中にすべてが存在すると説きました。6世紀以降には、タントラ仏教の流れである金剛乗仏教（密教）が現れました。これは現在では主にチベット仏教が代表しています。

様々な形のインド仏教が、アジアの他の地域へ広がっていき、声聞乗は特に南方（スリランカ、東南アジア）へ、大乗仏教は北方（中央アジア、東アジア）へ伝播しました。13世紀頃になると、仏教はヒンドゥー教と入り

混じった上、イスラーム勢力が強烈に拡大してきて大きなダメージを受け、インドでは消滅してしまいました。

2　声聞乗の経典

声聞乗仏教で最も知られている一派で、現存している唯一のものが上座部仏教（長老たちの教え）です。その経典はパーリ語で書かれており、スッタ・ピタカ（経蔵、仏陀または直弟子の教説）、ヴィナヤ・ピタカ（律蔵）、アビダンマ・ピタカ（論蔵）の3つの蔵に分類されるため、ティピタカまたは三蔵と呼ばれています。さらに、正典に含まれない重要な仏典もあります。例えば、「ミリンダ王の問い」（インドにあったギリシア系の国の王メナンドロスと僧侶ナーガセーナとの問答、紀元1世紀頃）や「清浄道論」（紀元5世紀にブッダゴーサが記した上座部仏典の体系的注釈書）などです。

3　大乗教の経典

スートラ*sūtra*はサンスクリット語で、パーリ語では*sutta*、日本語では経、中国語の発音はjingとなります。仏教では仏陀または直弟子による講義や説法のことです。大乗仏教には2種類の重要な経が存在します。

1）前節で触れた「経蔵」を構成するもの。散文形式で書かれており、伝説によれば、仏陀の直弟子である阿難が、仏陀の入滅直後に開かれた第1回仏典結集の場で暗唱したものです。そのため、すべてが「如是我聞」の一節から始まっています。パーリ語からサンスクリット語、チベット語、中国語に翻訳されました。

2）大乗仏教固有の経。その多くがサンスクリット語で書かれましたが、中国語版やチベット語版しか残っていないものも、かなりの数にのぼります。この経には以下のものが含まれます。

2a）紀元前1世紀から紀元1世紀に成立したとされる約40の経典からなる般若経典（サンスクリット語では*Prajñāpāramita Sūtras*）。仏陀が晩年に霊鷲山で説いたものとして説明されることが多く、その中には、世界は仮象にすぎず、心が幻として

投影されたものであるとする金剛般若経や、一切のかたちあるものは「空」であると力説する般若心経も含まれています。

2b）それ以降に成立したとされる経。すべての経が、空や、仏陀が教説に用いた方便、慈悲などを説いています。しかし、なかには本講演で扱う法華経のように、幻想的な内容、広大な時空、神変や聖なる存在がたくさん登場し、献身的な信仰を求める経典もあります。また教義的で哲学的な経もあります。2世紀頃にできて広く親しまれた維摩経や、5世紀に初めて中国語に訳されて影響力のあった楞伽（りょうが）経がその例です。

インドの大乗仏教では、スートラのほかに、ストートラ（*stotra* 讃歌／讃仏偈）、シャーストラ（*śāstra* スートラに基づいて竜樹〈2-3世紀〉や無著〈4-5世紀〉などが記した哲学的論書）、タントラ（*tantra* 密教経典）が作られました。

大乗仏教はかなり早い時期から、経（スートラ）そのものを崇拝していました。例えば、本来は仏陀や聖者の遺物を納めることだけを目的としていたストゥーパ（仏塔）に経を納めていますが、これが示しているのは、仏陀とその法（ダルマ）とは根底では同一であり、互いに代替可能であるという信条です。

4　インドにおける法華経

法華経すなわち「サッダルマ・プンダリーカ・スートラ（*Saddharmapuṇḍarīka Sūtra*）」（白蓮のごとき正しい教えの経）は大乗初期の経典のひとつで、般若経のすぐ後のものです。おそらく紀元1世紀に編纂され、ある期間は口承により伝えられて、紀元200年頃に成文化されました。原初のテキストは現存しておらず、今あるサンスクリット語版は中国語版よりもかなり後年のものであるため、サンスクリット語で書かれたのは一部だったのか全てだったのかもはっきりしていません。[1]

おそらく、いくつかに分離した形で伝播したか、異なった時期に加筆されたようですが、2世紀末には完成していたものと思われ、現存するサンスクリット語版、チベット語版、ふたつの中国語版からすると27品

スペインで2都市目となる「法華経――平和と共生のメッセージ」展（マドリッド展）で（2012年2月、スペイン文化会館）。手前は法華経の七譬の第五「衣裏繋珠の譬え」を描いた中国・敦煌莫高窟の壁画（第61窟）の紹介パネル

から成っていたようです。鳩摩羅什による中国語訳（妙法蓮華経）は最も普及した訳ですが、現在、中国や日本で見られる「妙法蓮華経」は第11品の後に「提婆達多品」が加えられて、28品となっています。本講演では、混乱を避けるために、最も普及している訳をもとに、28品として扱います。

インドでの大乗仏教の始まりについては、ほとんどわかっていません。また、インド人が歴史にあまり関心をもたなかったため、インドにおける法華経の歴史もほとんどわかりません。4‐5世紀の大仏教哲学者・世親によれば、法華経は重要な経典とされていたようです。しかし、インドにおけるその歴史については、これ以上語ることはできません。

5　法華経の内容

現代に生きる私たちができることといえば、現存する翻訳や後世に作られたものから、原典の内容について何がしかを論じることです。

5a）文章の形態、譬喩

法華経には、散文の部分と韻文の部分があります。教説や哲学的解説の経というよりも、むしろ宗教的な啓発に満ちた話の集まりといえます。もちろん、哲学も含まれており、なかんずく、すべての相対的現実は根底において「空」であるとしています。

こうした文章の目的は、教えを劇的に表現して、信仰心を湧き出させることにあります。法華経の中には、実在の人物や架空の人物、男女の神々、神話的な存在、仏や菩薩、その眷属たるあらゆる位の尊者たちが登場します。中心的登場人物は歴史上の仏陀である釈迦牟尼です。その今世での人生にも言及されていますが、同時に、自然を超越した能力をもつ宇宙的規模の存在としても描かれています。法華経の物語の舞台は、しばしば広大で宇宙的規模になり、幻想的です。一瞬にして広大な時空と仏菩薩の世界を行き交い、その多元宇宙においては、すべてがすべてと結ばれているのです。この世界では、天から花が降ります。楽器がひとりでに妙音を奏でます。天地も震動します。法華経を読む人は、宇宙的観点――個人的でありながら、なおかつ宇宙的な観点――から自らの存在を見つめることを余儀なくされ、生き方を変えるよう励まされるのです。

このようにして法華経は、物語を通して教えと人間の振る舞いを伝えているわけですが、特別な形式として7つの譬喩が用いられています。それらは重要な場面に登場して、大切な教えを示すのです。その「法華経の七譬（七喩）」とは、①三者火宅の譬え（譬喩品第三）②長者窮子の譬え（信解品第四）③三草二木の譬え（薬草喩品第五）④化城宝処の譬え（化城喩品第七）⑤衣裏繋珠の譬え（五百弟子受記品第八）⑥髻中明珠の譬え（安楽行品第十四）⑦良医病子の譬え（如来寿量品第十六）です。

5b）ストーリーと区切り

法華経は、あらゆる種類・範疇の存在すなわち一切衆生に対して「仏陀が最後に説いた経」とされています。至高の真実たる完全な教えをまだ説いていないことを仏陀が示すと、それを説いてほしいと要望されま

す。しかし釈尊は、集った僧尼の中にはこの教えを聞くことによって〔未聞の教えに驚き、疑って、転落するので〕危険かもしれない〔増上慢の〕人たちもいるとして、説こうとしませんでした。自分がそうであると思った者たち〔五千の上慢〕がその場を去り、説法が始まります。

天台宗に関しては第8節で触れますが、その天台宗の実質的開祖・智顗のときから法華経全体を大きくふたつに分けるようになりました。

1）序品から第十四品：表面的・一時的なものの空しさに焦点が当てられています。この部分の中心となるのは方便品第二で、「一仏乗」とそれを説くための様々な「方便」について述べられています（5gを参照）。

2）第十五品から第二十八品：これはさらに進んだ教義で、釈尊の本地と様々な垂迹について書かれています。中心となるのは如来寿量品第十六で、仏の寿命が計り知れないほど長いことと、一切衆生が成仏できることがテーマです。智顗は、寿量品には仏の無上の教えが含まれており、仏教で最高の経であるとしています。

以上が伝統的な分け方です。近代になると、特定の宗義に依拠せず、法華経成立の歴史を再構築しようとする試みに基づいて、3つの部分に分ける場合もあります。

1）第二品から第九品：最も古いと思われる部分。声聞に向けられたもので、宇宙全体を包括する真理と「一仏乗」に焦点を当てています。

2）第十品から第二十一品：後に付け加えられた部分であり、〔声聞よりも〕菩薩に向けられたもので、仏の寿命が途方もなく長いことを中心にしています。ちなみに、序品第一も、ここまでのふたつの部分の共通の導入部として後に追加されたと考えられています。

3）第二十二品から第二十八品（おそらく提婆達多品第十二も含まれる）：菩薩行と菩薩道を示すために、模範的な菩薩たちについて記した部分です。

このうち、初めの部分では、偉大な智慧を特長とす

る文殊菩薩が活躍します。如来寿量品第十六からは慈しみの未来仏である弥勒菩薩に主役を譲っています。終盤の諸品では、徳に満ちた様々な菩薩が登場します。例えば、日常生活での智慧と慈悲を兼備した普賢菩薩のような菩薩です（普賢菩薩勧発品第二十八）。

序品第一から法師品第十までの舞台は霊鷲山です。[2] 見宝塔品第十一から嘱累品第二十二の説法は虚空で行われ、聴聞する大衆も虚空へ昇っています。それ以前の品で十分に生命が清められた後、一切衆生に普遍的に存在する仏性を知見するためには、虚空が最もふさわしい場所なのです。嘱累品第二十二の最中に地上の霊鷲山に戻り、そこで経が最後まで説かれます。これは、虚空に昇った後には、修行して他者を助けることができる唯一の場所すなわち地上に戻らなければならないということを示しています。

5c）哲学：空

法華経全般にわたって暗黙のうちに染み込んでいる根本的哲学概念が、ふたつあります。

1）諸法皆空／法空（*dharma-śūnyatā*）：すべての事象には固定的な自性がなく、すべて一時的なもので実体がない。

2）諸法平等／法平等性（*dharma-samatā*）：すべての事象は等しく固定的な実体がないため、存在論的に同じカテゴリーに属する。すなわち上位の事象も下位の事象もない。

後期の仏教では、「空」を一切の根源や絶対的存在のような、無限にして究極の実在とするに至ったこともありました。しかし法華経ではまだ、「空」はすべての相対的現象がともにもつ特質（その相関性や依存性）のことを指しているだけです。

5d）釈迦牟尼と宇宙的な仏

如来寿量品第十六では、歴史上の仏である釈迦牟尼について、数十年を生きて、成仏し、東奔西走して法を説き、入滅するだけの人間ではないと説いています。久遠の昔に成仏し、その時から衆生救済の智慧を説き続け、その後もそれまでの二倍の期間、法を説き続け

るとするのです。しかし、厳密には永遠の存在ではありません。なぜなら、空の教義からすると、永遠不滅の存在は無いからです。それでも、普通の人間の寿命と比較すれば、その途方もなく長期間にわたる存在は実質上、永遠といえます。実際に無限の寿命をもつ仏は、私たちの眼には宇宙的で、超越的で、別の存在のように映りますが、行者ゴータマ・シッダールタにほかならないのです。宇宙的・偏在的な釈尊と歴史上の釈尊。ほぼ神格化された存在と人間。その両面は互いに別の側面でありながら、一体で切り離すことができないのです。

5e）仏と菩薩

前述の通り、如来寿量品第十六を中心とする従地涌出品第十五から普賢菩薩勧発品第二十八には、釈尊が宇宙的規模の長年月の間に様々な姿で顕現することが示されています。それに加えて、釈迦牟尼仏と基本的には同等である数多（あまた）の仏や菩薩の存在が示されますが、彼らは、様々な方法で、釈尊と同じ教え（法）、同じ悟りを説きます。彼らは永遠の存在ではないものの、すべての時を包括すると考えられます。つまり、すべての時代のすべての場所に存在するのです。

例えば、仏の教えに従う数えきれないほどの菩薩が存在します。これらの菩薩は、すべての仏がもつ知見を広めるという使命を果たそうとしているのです。ですから、釈尊とその法は菩薩の中に息づいています。この法華経後半部に現れる菩薩は、まさに仏性――それは誰もが湧現できるものです――を体現した存在と言ってよいと思います。

諸仏の実際上の同等性が、見宝塔品第十一で目に見えるように表現されています。すなわち、釈尊と多宝如来が宝塔の中で並んで坐しているのです。

5f）悟りの普遍性――誰もが成仏できる

一切衆生は遅かれ早かれ成仏することができます。長い年月がかかるかもしれないし、超人的な努力が必要かもしれませんが、みな仏になれるのです。三草二木の譬え（薬草喩品第五）にあるように、法はすべての

人に平等に降り注ぐのです。

この真理は、多くの衆生の未来の成仏に関する釈尊の数々の予言にも含まれています。法師品第十では、比丘、比丘尼、優婆塞（うばそく）、優婆夷（うばい）、声聞、菩薩、竜王、乾闥婆（けんだつば）らの成仏について説かれています。ここには、法を体得した衆生が属するすべての階級が示されているのです。

釈尊のいとこでありながら釈尊を殺そうとした嫉妬深い提婆達多のような悪人も（提婆達多品第十二）、修学の足りない者も（勧持品第十三）、女性も（提婆達多品で八歳の竜女が成仏）成仏しています。法華経は、女性が一度男性になることなく（変成男子しないでも）即身成仏できることを明確に示した極めて稀な仏典のひとつです。〔竜女成仏については〝変成男子の姿を見せる以前に竜女は成仏していたが、男子しか成仏できないと思い込んでいる舎利弗らの疑いを解くために男子の姿を現じて見せた〟との解釈がある〕

これが法華経に見られる「仏性」（仏の本質・仏の特性）です。誰もがあまねく仏になる能力をもっているのです。法華経以後の経典では、仏性を森羅万象の中にあるが表に出てこない超越的実在として捉え、抽象的な教義を展開しています。しかし、智顗が繰り返し述べているように、この手の抽象的な仏教学を法華経に当てはめるのは正しくありません。法華経ではまだ仏性が存在論的立場を取っておらず、ただ普遍的な能力を表しているのです。

この教えは、法華経の中で幾度となく様々な形で繰り返されており、読む人の内面にも外面にも平和を生み出していきます。法華経を読む人は歓喜に包まれます。それは、自分自身もまたひとりの菩薩であり、必ず到達できる成仏への途上にあることを知り、大いなる智慧と平穏と幸福にあふれて人生に向き合えるようになるからです。

さらに、一切衆生が成仏できることを知って、いのちあるものすべてに等しく無限の価値があることを認め、最大の畏敬と崇拝の念をもって接するようになります。こうすることによって必然的に、お互いが大きな調和で満たされていくのです。

5g）多くの方便をもつ一仏乗

方便品第二では、教えの様々な形態について説かれ、仏道修行の次の3つの形態について触れています。

1）声聞乗。教団の中で生活し、解脱して涅槃に入り阿羅漢になろうとする比丘のための教え。これは釈尊が四諦によって授けた基本的な教えです。大乗の観点からすれば、部分的で限定的な教えとなります。悟りへの途上の休息所にすぎず、完全な解脱ではありません。しかし、声聞も最終的には菩薩になることができます。

2）縁覚乗。目的と結果は声聞と同一で、唯一の違いは修行を自分独りで行うことです。

3）菩薩乗。一切衆生のために完全な悟りを得たい、すなわち仏になりたいと望んでいる者に対する教えです。大乗に特徴的な仏道です。

実際には、一仏乗というひとつの乗り物しか存在していないのですが、様々な方便によって3つの方法を取り入れ、異なった能力や状況に適応しているわけです。しかし、どのようなレベルの法であれ、仏教を実践する人は、まさに菩薩なのです（法師品第十）。なぜなら、誰もが最終的には悟りを得て慈悲深い仏となるからです。法華経には排他的見方や教条的態度は見られず、直接的・間接的に悟りへと向かうすべての人、すなわち一切衆生に開かれた大きなビジョンがあります。

この一仏乗に関しては、数多の譬喩で表現されています。例えば、火事になった家で父親が子どもたちに家から逃げるように説得するために、それぞれの好みにかなった車（三乗）を与えることを約束します。子どもたちが家から逃げ出すと、約束よりもずっと高級な別の車（一仏乗）を与えるのです（譬喩品第三）。信解品第四に登場する父親は、〔長い間、流浪していた〕息子を労働者として雇いますが、彼が自分の財産の相続人であることを最終的に明かします。薬草喩品第五では、同じ雨の恵みを受けている植物が、おのおのの性質に応じて生長しています。化城喩品第七で、神通力で現れた都市（化城）は、宝へ到る道中で必要なものではあっても、休憩所以上のものではありません。

根底に流れる概念は、多様性における統一です。一

切衆生が、それぞれの限りない多様性をもちながら、仏になれる共通の可能性を共有しているのです。そのため、仏教の卓越した教えは私たちの状況に巧みに適応し、最も効果的な方法で悟りへと導くのです。法華経は、いかなる時でも、この多様性を忌避せず、賛嘆します。多様性は仏道における障害ではなく、仏道の重要な構成要素のひとつです。最終的に克服すべき一時的なものでもありません。例えば、天界にも声聞界が具わっているのですから。方便とは、機根の劣る修行者の無明ゆえに、やむをえず使う詐欺的な手段なのではありません。生の最終目的へと我々を導いてくれる「素晴らしく巧みな方法」なのです。

5h）信仰心を説く仏教――観世音

前述したように、大乗仏教では、信仰についての側面が強く説かれており、仏と菩薩に対する「信仰心」の宗教的重要性が増しています。これによって、不死にして全能の救済者を待望する大衆の心は満たされていくのです。この要素は、法華経のなかによく見てとれます。例えば、観世音菩薩普門品第二十五は、観世音菩薩のために割かれています。（サンスクリットのAvalokiteśvaraは）漢訳経典で「観世音」と訳されましたが、これは「世の叫びを観てとる」という意味です。観世音は、力と智慧と慈愛に満ちた菩薩として描かれ、苦難にあっては手を貸してくれ、災厄からは助け出してくれ、代わりに苦しんでくれさえする存在とされています。観世音の名を唱えれば、いえ、その名前を心に思い起こしただけで、目前のすべての問題が解決していくのです。

信仰心を説く仏教は、かなり発展した仏教ですが、将来たどり着くレベルには、まだ達していません。法華経では、ストゥーパ（聖遺物を納める記念塔）とチャイティヤ（堂塔）の建設について触れていますが、後に大乗仏教で大切になる仏像礼拝の痕跡はありません。

5i）法華経への崇拝

法華経は仏陀の最高にして完全な教えとされており、宇宙的規模の年月の間に、数えきれないほど繰り返し

「法華経――平和と共生のメッセージ」展は2013年９～10月、九州でも開催され、５万４千人もの来場者を迎えた（福岡市の創価学会九州講堂で）。日本では東京・大阪に続く３都市目となる

説かれています。「教法」や「仏性」と同様に、「法華経」は、すべての時にわたるものであると言えます。そのため、この上なく貴重なものであり、その経文に触れれば喜びが湧き上がり、他の人に分かち合いたい気持ちになります。そして、その素晴らしい特長自体が、法華経を理想的な「信仰対象」としているのです。

経典を前にして感じる信仰心を表現し養うためには、経を学び、読み、聞き、記憶し、説き、供養し、誦し、書写し、教え、広め、保存し、護ることです。こうした行動のすべてが内面を浄化してくれ、悟りへと近づけてくれるのです。

5j）他の修行

仏や菩薩への、なかんずく法華経自体への信仰行為のほかに、法華経には仏教の様々な段階でのすべての修行が現れています。最も初歩の修行としては、「〔四無量心のうちの〕捨無量心（心が平静で差別しないこと）」や「出離（煩悩・執着から抜け出る）」に加えて、声聞乗で説く八正道のすべてを行うことを勧めていると考え

られます。大乗仏教による特徴的な修行である菩薩の六種の善行（六波羅蜜）についても述べています。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の修行です。空、慈悲、善についての自覚を育む必要性にもしばしば触れており、それは特に登場人物を手本とするように誘うエピソードで顕著です。例を挙げると、薬王菩薩本事品第二十三から普賢菩薩勧発品第二十八に登場する菩薩が神通力、教化、慈悲を施したり、常不軽菩薩品第二十の不軽菩薩のように、すべての人に仏性があることを説いて人々を礼拝したりします。これらは善行の実行の手本を示しているのです。

6　中国における仏教

ある伝承によれば、仏教が中国に伝来したのは、紀元2年のこととなっています。歴史的により確実なこととしては、紀元67年に訳されたとされる声聞乗の「四十二章経」が中国語への初めての訳経だということでしょう。また、般若経の最初の漢訳は179年に編纂されました。はじめ中国では、仏教は〝野蛮国における道教〟のように捉えられていました。伝説によれば、老子が牛に乗って中国から西方（インド）に渡っていたので、そこから道教が仏教へと形を変えて戻ってきたとされたのです。サンスクリット語の主要な経典が中国語に翻訳されたのは3世紀になってからであり、4世紀になると正式に仏教教団の中国進出が認められました。5世紀から6世紀にかけて、仏教は中国国内に広がり、帝国の援助を受けるに至りました。こうして僧院や寺院の建設が増加し、経典の新たな翻訳を含む仏教研究が盛んになりましたが、国家権力が仏教をよく思わなかった時には、二度にわたり迫害を受けました。〔北魏の太武帝と北周の武帝による弾圧〕

インド仏教の主な部派はすべて中国に入りましたが、主流になったのは大乗でした。知識層は、大乗の大きな形而上学的創造力と、もともと彼らがもっていた思想との類似性に魅力を感じましたし、一方、大衆は苦難の中ですがることができ、彼らを救済してくれる存在が大乗に説かれていることに魅かれたからです。その結果、例えば、インドにおける中観派は、般若経と

維摩経を基盤として三論宗となりました。その否定神学的な観念は、道教の類似の表現をほうふつさせます。〔否定神学は、神は人間に把握できる概念をすべて超えているので「神は〜でない」という否定表現で語ろうとする〕

6世紀から9世紀にかけて、仏教は中国で隆盛を誇りました。1世紀から6世紀までは、中国に存在した仏教はインド仏教でした。つまり中国国内の外国の宗教だったのです。6世紀以降は、中国仏教について論じることができます。まぎれもなく中国文明の特徴をもった中国生まれの宗派が出てきたのです。その頃に、禅宗、華厳宗、天台宗、浄土宗――この4宗派はやがて日本にも生まれ、これに日本生まれの日蓮宗の流れが加わることになります――そして法相宗など様々な宗派が生まれ発展しました。またこの時期、中国語の大蔵経が編纂され、続いて日本でも作られました。それは、古いインドの文献の翻訳のほかに、中国の論師の論を加えたものです。

僧院は次第に世俗の有力者たちの趣向に過度の影響力をもち始めました。その結果、８４５年には弾圧されて、僧院は解体され、僧侶は還俗させられました〔唐の武宗による廃仏〕。仏教は僧団と彼らが生活する僧院とが支柱となっていたため、この事件は決定的な打撃となり、9世紀以降、仏教は衰退し始めます。

10世紀から17世紀にかけては、道教と仏教と儒教が折衷されて融合するようになっていきました。この時代には、実際に重要視された独立宗派は禅宗と浄土宗だけでした。天台宗や華厳宗なども生き残ってはいましたが、少数派でした。

17世紀から19世紀になると、チベット仏教が充実した経典と密教の伝統とともに中国に入ってきたことにより、一時的に仏教が勢いを取り戻しましたが、依然として衰退の情勢は変わりませんでした。それでも、19世紀末になると、西洋の影響で仏教研究が盛んになり、中国における仏教は、現代に適応しようとしつつ、ある程度、復興し始め、その傾向は20世紀に顕著になりました。この動きは共産主義の厳しい時代で中断しますが、１９７０年代から再開されました。

7　法華経の中国語訳

法華経の漢訳は、少なくとも６種（別説では７種あるいは17種）、中国語へ翻訳されていますが、現存するのは３種だけです。それは、竺法護によるもの（２８６年）、鳩摩羅什によるもの（４０６年）、闍那崛多（じゃなくった）と達磨笈多（だるまぎゅうた）によるもの（６０１年）で、よく用いられるのは鳩摩羅什による訳です。

鳩摩羅什（３４４年-４１３年、別説も）はクチャ（中央アジア）に生まれました。インドに渡って、あらゆることを学び、最終的には大乗仏教を中心に修学しました。４０１年に中国に渡り、大きなチームの人手を借りて、多くの大乗仏教の経典を訳しました。なかでも傑出しているのが法華経（４０６年）です。その翻訳を「妙法蓮華経」と題し、これが最も流布した翻訳となりました。法華経の東洋における注釈や西洋における翻訳は、ほとんどがこれを基としています。数百年前から、無量義経を開経とし、観普賢菩薩行法経を結経とすることが多く、これらはまとめて法華三部経と呼ばれています。

8　中国における影響Ⅰ　天台宗

8a）概要

中国仏教の宗派である天台宗――その名は宗派が誕生した山（天台山）に由来します。三論学派（中観派）の教義をベースにしており、そのため、これを創始した竜樹を始祖とします。三論学派の中心的教義は、前述のように、諸法皆空です。しかし、天台宗では、インド的概念の単なる翻訳ではなく、考え方を伝統的な中国の概念に適合させているため、典型的な中国仏教の形態をなしています。例を挙げれば、理（隠れた真理）と事（その真理の顕現としての現象）のような中国的カテゴリーです。

この宗派の実際上の開祖は第四祖とされる智顗（５３８年-５９７年）です。智顗は一切経を学んだあと、釈尊の教えの最も優れたエッセンスは法華経の中にある、との結論に達しました。その上で、仏性の普遍性（一切衆生悉有仏性）を説く大般涅槃経によって、法華経と般

若経の教えが補完されるとしました。このため、この宗派は法華宗とも呼ばれます。

天台宗で最も特徴的なのは、包括的な宗派であることです。釈尊の教えを「五時」――最高の二経すなわち法華・涅槃時での一仏乗を頂点とします――と「八教」――頓教、漸教、秘密教、不定教、蔵教、通教、別教、円教――に整理して、それまでの諸宗のすべての立場を統合しました。単純で具体的な教えから複雑で難解な教えに至るまで、すべての仏教の教えを判定し解釈して分類しました。誰もが仏性をもっていますので、どの形態の仏教を信仰しても、最終的には、すべての人が救済されます。

8b）教義

智顗が唱えた仏教の真髄が何であるのかを見てみましょう。まず、絶対唯一の実相である真如を認めています。真如には不変真如と随縁真如の二面があります。前者が不変の超越的存在の真如であり、後者は変化する経験的世界の真如です。森羅万象は絶対的な仏性が顕現したものなのです。この考えによって、仏教のもともとの多元論から離れて一元論的形而上学になります。

実相は「唯一の真実」ですが、真如の2つの側面から派生する「3つの側面」も具えています。これが三諦であり、以下のように説かれます。

1）空諦：諸法は相互依存しており、空である。

2）仮諦：諸法は仮のかたちをとり、表面的・一時的・限定的で、現象的に見えるが、実相と完全に離れたものなのではない。

3）中諦：空諦と仮諦を含みながら、それらを超越する。空諦と仮諦は相互に依存して、同一のものだからである。真如は現象と別のところにあるのではない。一切の法は相互に浸透し合っており、全体と部分を分けることはできない。相対的なものと絶対的なものはひとつなのである。

空、仮、中は詰まるところ、ひとつのものであり、唯一の真実を織りなす3つの側面なのです。

宇宙は十界から成っています。そのうち六界は地獄

界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界であり、執着と痛みに満ちた無明の世界を輪廻するのです。他の四界は声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界で、光に満ちた世界です。それぞれの界には、それ以外の界が具わっており、お互いに包摂し合うかたちになっています。

すべての存在が、すべての存在と相互に結ばれているという教義について、伝統的に、一塵にも一念の中にも三千世間が具足していると表現しています。

8c）修行

天台宗は、典型的な中国的総合のやり方で、それまでの教えを統合した際、思想だけではなく、極東地域の仏道修行についても統合を行って、一宗の基礎を整えました。天台宗の修行に関するいくつかの説を見てみましょう。それまでの修行を統合し、段階的に位置づけていこうという努力がうかがえます。

例えば、三昧（精神の集中）を四段階に区別しています。

1）常坐三昧：阿弥陀仏の像を前にして坐禅を行じる。

2）常行三昧：阿弥陀仏の像の周りを歩いて巡る。

3）半行半坐三昧：前の二つの修行を一定の仕方で組み合わせる。

4）非行非坐三昧：日常生活において、一定の行儀を定めず、思念の起こりや持続、その消滅などを観じる観法の修行を行う。

大きな影響力があった天台宗独特の行法は「止観」です。これは、仏教の伝統的手法である「止」（心を乱さず静止させる禅定）と「観」（「止」によって起こる正しい智慧で、対象を観ずる）の天台宗版です。これもまた体系的な修行であり、精神の集中と熟考の仕方が初級段階から用意されており、修行の結果、精神をコントロールできるようになり、諸法の空なる実相、精神のかたちなき本質を把握できるようになります。修行の最高位は、あらゆる存在の空性を理解する境地です。このための瞑想では「印」（象徴的な形に両手を結ぶ）と「曼荼羅」（仏の世界を視覚的に表現したもの）を用います。この修行は日常の活動を止めることなく行うことができます。

すべての修行の最終目的は、個人的な悟りを得ることだけではなく、宇宙全体を浄化して、浄土へと変えることです。

8d）影響

天台宗は、教理を肯定神学的に表現し提示したこともあって、中国で大きな成功を収めました。しかし、9世紀になると勢いのある強力な宗派ではなくなり、それ以降は知識階級だけの少数派になりました。しかし、中国仏教の形成に永遠の歴史を刻みました。

天台宗の影響は日本のほうが大きく、僧・最澄（767年-822年）は天台宗を日本に伝え、日本でもそのまま天台宗と呼ばれました。日本天台宗の総本山は京都郊外の比叡山でした。ここで、法然（浄土宗の開祖）、親鸞（浄土真宗の開祖）、道元（曹洞宗の開祖）、日蓮ら日本仏教の祖師や改革者たちが学んだのです。こうして、天台宗ならびに天台宗によって広まった法華経は、日本仏教の発展に大きな影響を与え、その結果、今日に至る日本文化全般に影響を及ぼしました。[3]

9　中国における影響Ⅱ　その他の影響

9a）総論

前述したように、天台宗にとって法華経は仏教の最高の経典であり、天台宗が大きく隆盛したことが大きな原因となって、鳩摩羅什が翻訳した時代から今日に至るまで、法華経は中央アジアと東アジアで、おそらく最も普及し影響力をもつ経典となりました。天台宗と日蓮宗だけが、法華経こそ最高の経としているわけですが、他のすべての宗派も、最も重要な経典のひとつとみなしており、例えば禅宗の寺院でも、日常的に法華経は誦されています。また、法華経は極東の仏典の重要な基礎のひとつというだけでなく、経典自体が聖なる崇拝の対象となっています。そのマントラである題目（南無妙法蓮華経、「蓮華の花のごとき妙なる経を礼拝します」）を唱えることは仏道修行の重要な項目になっており、日蓮仏教においてはその中心に置かれています。

現代の台湾やシンガポールの寺院でも、法華経は絶

え間なく誦され続けてきました。この数十年、中国大陸で仏教が復興し始めたことにより、法華経の研究や読誦が力強く再開されています。しかしながら、中華人民共和国の主要な仏教教団には、法華経を基本経典とするものはまだありません。

9b）観音崇拝

観世音菩薩普門品第二十五は、観世音菩薩（世の叫びを観じる菩薩）に関する重要な経です。この経で観世音菩薩は初めて登場するのです。Avalokiteśvara菩薩（慈愛をもって「下界を観る」菩薩、5hの最初の部分を参照）は中国では観世音／観音と呼ばれ、女性とみなされました。この経に基づき、東アジアでは大衆が観音を信仰しています。この地域では観音は最も人気があって重要な宗教上の存在であり、仏教寺院をはじめ、中国で広く信仰されている道教の寺院や、日本の神社にも祭られ、一般家庭でも信仰されるとともに、公共の場所にも巨大な観音像が建っています。仏教学者たちの否定的な見解にもかかわらず、観音を信じる人たちにとっては、観音は単なる菩薩ではなく、苦しむ人々を助けるために菩薩の姿をとって現れることを誓った真実の仏なのです。観音に対する人気から、法華経のこの品は、何世紀にもわたり、独立した経典（観音経）として普及しています。

10世紀以降、観音経の影響が一助となって、中国では次のようなものが強化されました。人を救うために巧みな方便を使うこと、仏と菩薩に厳格な区別をしないこと、女性のリーダーシップの可能性、貧しい人々への慈悲心、日常生活の中に仏の法を観ることなどです。

9c）文学と芸術

法華経の筋書きと説話は、極東地域全体で広く知られており、高尚な文学にも大衆文学にも繰り返し描かれています。

また、中国の造形美術も法華経の影響を受けています。法華経の物語だけに基づいた絵や像もしばしばあります。例えば、多くの顔をもつ観音像、多宝塔で並

座する二仏（釈尊と多宝如来、見宝塔品第十一）、六牙の白象にまたがる普賢菩薩（普賢菩薩勧発品第二十八）、譬喩品第三の譬えの火宅などです。

9d）政治と社会への影響

最後に、法華経の教えは政治的抵抗や政治改革を正当化するために用いられることもありました。台湾や日本における様々な改革運動の根拠にもなりました。例えば台湾では、世界最大級の仏教慈善団体である慈済基金会の創設者・釈証厳（１９３７年-）の発心のきっかけも法華経でした。

10　結論

２千年にわたるインド・中国での法華経の歴史と影響を、鳥瞰的に、わずかばかり見てきましたが、以上で講演を結びたいと思います。講演の準備を通じて、この無尽蔵の経典に関する理解を、わずかながらも深めることができ、この機会を与えてくださったスペイン創価学会に感謝申し上げます。この数週間、取り組んできた法華経の研究と調査の結果から、私たちは多くの恩恵を得ることができました。これがすべての人々にとっても役に立つことを望んでやみません。

原注

（1）１８５２年にEugène Burnoufが出版した法華経の最初の西洋言語への翻訳である*Le lotus de la bonne loi*は、この後年に編集されたサンスクリット語版をもとに訳された。

（2）インド北部にあり、伝承によれば、釈尊が多くの経（特に大乗仏教）を説いた。

（3）日本における法華経の影響に関しては、これを補完する講演で部分的に紹介している。Rubio 2013を参照。

参考文献

Bapat, P. V., ed., 1997, *2500 Years of Buddhism*, New Delhi, Publications Division. Ministry of Information and Broadcasting. Government of India.

Bauer, W., 2009, *Historia de la filosofía China*, Barcelona, Herder.

Blum, M. L., 2006, “Escrituras Mahayana”, en Trainor, K., ed., *Budismo*, Barcelona, Blume:196-205.

Conze, E., 1978, *El Budismo. Su esencia y su desarrollo*, México, FCE.

Harvey, P., 1998, *El budismo*, Madrid, Cambridge Univ. Press.

Kato, B., *et alia*, 1975, *The Threefold Lotus Sutra*, Weatherhill/Kosei, New York/Tokyo.

Kotsuki, H.,ed., 2010, *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from Cambridge University Library (Add. 1684). Romanized text*, Tokyo, Soka Gakkai.

Masiá, J., 2009, *El Sutra del Loto*, Salamanca, Sígueme.

Niwano, N., 1989, *A Guide to the Threefold Lotus Sutra*, Kosei, Tokyo.

Pye, M., 1995, "The Lotus Sūtra and the Essence of Mahāyāna", en Takeuchi 1995:171-187.

Reeves, G., 2008, *The Lotus Sutra*, Somerville (Massachusetts), Wisdom.

Rubio, C., 2013, "El 'Sutra del loto' en la literatura japonesa: una lluvia de primavera", *Budismo en diálogo* nº 99, julio 2013:71-94.

Schumacher, S. y Woerner, G., 1993, *Diccionario de la sabiduría oriental: Budismo, Hinduismo, Taoísmo, Zen*, Barcelona, Paidós.

Takeuchi, Y. (ed), 1995, *Buddhist Spirituality*, Delhi, Motilal Banarsidass.

Torradeflot, F., 2013, "El 'Sutra del loto' en la cultura y la espiritualidad occidentales", *Budismo en diálogo* nº 99, julio 2013:57-70..

Unno, T., 1995, "San-lun, T'ien-T'ai, and Hua-yen", en Takeuchi 1995:343-365.

Warder, A. K., 1991, *Indian Buddhism*, Delhi, Motilal Banarsidass.

Watson, B., 1993, *The Lotus Sutra*, New York, Columbia University Press.

(Javier Ruiz Calderón ／哲学博士。
専門はインド学・インドの宗教哲学)